
ちょっと不良なかぐや姫

YSR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよつと不良なかぐや姫

【Nコード】

N7791G

【作者名】

YSR

【あらすじ】

これは、月に戻って1300年ほど経った「かぐや姫」(1324)と、それを取材する地球人記者ワタナベ(30)との取材記録である。

（前書き）

注意：決して真面目な小説などではありません。内容については一切責任を負いかねます。突っ込みたいときはコメント欄に突っ込んでください。見つけ次第改定します。それでは、この小説をお楽しみください。

「・・・日本語が一番辛かったかしら」

「でも最近はそれもまた変化しているようで。まあ、昔から常に変化し続けているんですけどね」

「・・・そうなんですか。えー、では、そろそろ本題に移りましょう。まず、一体どうして、地球にやってきたのですか?」

「そうですね・・・話すと長くなりますし、ちょっと口調が当時に戻るかもしれません・・・宜しいですか」

「・・・はい」

「それでは・・・えー、

二

まあ、あたしは昔、結構悪いことしてたのよ。万引きしたり、他人の男寝取ったりしてね。

それでああ、警察に捕まって裁判を受けたのよ。・・・え? 勿論月の世界じゃ「警察」なんてダサい名称じゃ無いわよ。分かりやすく言い換えてるだけ。

で、結果は勿論有罪、地球に追放されたの。・・・これはマジよ。刑を言い渡された時は「えー、ウツソー!」って感じて絶望したわ。だって地球よ地球? ありえないくない?」

「・・・どうなんでしょうか・・・」

「まあ、更生させる意味もあつての刑らしいけどね。それも一回若返らせてから追放するから、当然記憶はさらっぴん。0からのスタートよ」

「なんとという刑罰だ・・・」

「まあ、誰かに拾ってもらわないと更生以前に餓死するから、強力な光源もついでに入れられたのよ。ついでに私の生活用の仕送りもね」

「・・・じゃあ、『本光る』とか『金ある竹』って、全部向こうが

仕送りしてきたってことですね……」

「そういうこと。で、あのジジババの元で成長したってわけ」

「『ジジババ』は言い過ぎなんじゃ……」

「いいじゃない。実際そうだし……実は月の民は、初めが小さいワリに、成長がカナリ速いのよ。だから、たった3ヶ月でオトナな女性に育ったってわけ」

「無茶苦茶速いですね……」

「でしょー？地球の民なんて人生の1/2〜1/4ほどを成長に費やしてるのよね？もったいないわねえ」

「……それが青春なんじゃ……」

「まあそれからは、求婚の嵐よ。でも、みんな断ったわ。だって当然じゃない？姿は同じでも、誰が、寿命が1/30しかないのと付き合わなきゃいけないのよ。それは地球人でも同じでしょ？」

「……」

「でもホントのことは言えないから、『オトコなんて表面だけで中身が分からないからイヤ』ってジジババに言つといたわけ。それでもあの5人の男どもだけはしぶとくやって来るのよ」

「えー……5人の男とは、石作皇子・車持皇子・右大臣阿倍御主人・大納言大伴御行・中納言石上鷹呂のことですよね？」

「……そんな名前だったかしら？」

「文献によればそうですけど……」

「まあいいわ。顔もなんとなく思い出したし。で、とりあえずその5人にさっきの理由で”指定した物を持ってきて”って伝えたのよ……まあ、そんなもんあるはず無いからこれで安泰、と思ったわけ」

「あの難題ですね……」

「しかし、あいつらは伊達にかぐやラブじゃなかったのよ……」

「5人とも、それなりにがんばったのよ……」

「初めは石作皇子。天竺インドから持ってきたって言うから見てみればとんだニセモノ。何が『百千里のかなたから持ってきた』よ。思わずキレて外に投げ捨ててやったわ」

「それはヒドイ男ですね・・・」

「次が車持皇子。こんどはちゃんとした綺麗な枝を持ってきたかと眺めていると、これが話がウマイのよ。月の民である私が聞き惚れるほどよ。思わず本物とジャッジしそうになったら、外に6人のオヤジ達が来てね。『おい車持、金払え!』とか叫んでいるのよ。で、その枝を返してとつと帰らせたのよ。地球の民もやるもんねえ!」

「まあ・・・職人は今も昔もすごいものですから」

「その次にやってきたのが右大臣阿倍御主人。どこぞから買ってきたらしいけど、試しに焼いてみたらメラメラと燃えちゃって。当然ながら顔も真っ青よ。まさかニセモノだとは思わなかったらしいから、ざまあみろって気持ちで歌を返したわ」

「悪徳業者ってヤツですね・・・」

「まあそんなとこね。そして次が大納言大伴御行。本気で取りに行つたはいいけど、失敗して大きなこぶが2つも出来た・・・流石に悲惨ね」

「本当ですね・・・」

「で、最後が中納言石上麻呂。まじめにツバメの巣まで上って取ろうとしたら転落して、掴んだのはツバメの糞・・・しかも、その一撃が祟って早死に・・・。それは流石に可哀想に思ったわ」

「悲劇だ・・・」

四

「・・・まあ、あの5人を退いてやれやれと思ったそのとき」

「・・・帝がやってきた、と？」

「そう。流星にびつくりしたわ。なにせその国のトップ。そこから直々に来るなんて」

「まあ、それだけかぐやさんが美しかったことの証ですね！」

「・・・『かった』？」

「・・・すみません、『そのときも美しい』の間違いですね、訂正します」

「・・・よろしい。流星帝、軽薄ってわけじゃなかったわ。でも、前述の理由でどっちにしても対象外ね。消えたりして、”地球の民ではない” ことを見せ付けたら流星に残念がっていたけどね」

「はあ・・・ええ！？消えるんですか!？」

「そうよ。まあ、月の民の特殊能力ね」

「特殊能力って・・・そうなんですか・・・」

「まあ、そんなこともあったけど、そつから3年、ぼんやりと地球で過ごしたわ。帰りたいけど、3年経たないとお迎えが来ないしねえ・・・」

「・・・お迎えですか」

「いくらあたしでも、自力で戻るなんて出来ないし、第一”更生中”だもんね。まあ、待っていたのよ」

「・・・さびしかったんですか」

「友達もいないしねー。まあ、月と違って四季はあるし、その意味では楽しんだわ」

「・・・月にはやっぱり四季はないのか・・・」

五

「そして3年後。いよいよ帰れるって時に、不覚にも悲しくなつてね。帰れるんだから嬉しい筈なのに」

「・・・なぜなんですか」

「楽しかったのよ。地球の生活も。四季があるってこともあるけど、なんだか飽きないのよ。美男美女以外もいゝゝゝゝっばいいるしね」

「へえ・・・って、えええ!!? 月には美男美女しかいないんですか!!?」

「地球の基準で」って話よ」

「そうなんですか・・・月が羨ましい・・・」

「止めときなつて。どうせ合わないから。寿命も文化も言語も、そして何より性格が違うしね・・・」

「そうですか・・・残念です」

「で、それを聞いたジジババが」

「・・・やつぱりジジババなんだ」

「絶対帰らせないって、兵士を山ほど呼んだのよ。地球の民がいくら頑張ったところで、勝てるわけ無いのに・・・」

「・・・」

「そして8月15日。終にやってきたわ。当然ながらどんなにがんばっても無力、ある意味これも強制拉致ってところね」

「・・・なんか違うんじゃない」

「とはいえ、迎えの使者もちょっとウザかったわ。『賤しきおのれ』とか『きたなき所のもの』とか地球の民に大して言いたい放題。いくら事実でも、ちょっとね・・・。別にマズくは無かったし」

「はあ・・・ところで、どこで『ウザい』なんて言葉を学んだのですか?」

「え? 文献からだけど? 地球に派遣された月の民が、情報を送ってくるのね、この月に」

「月の特派員ですか・・・」

「まあ、話を戻すわ。で、何も無しで立ち去るのもちょっと・・・」

と感じたから、使者が渡してきた不死の薬の一部を着物に包んで、手紙と一緒に置き土産にしようとしたの。使者は止めようとしたけど、別にいいじゃない？どうせ薬を飲んでも別の原因で死にかねないし」

「そりゃそうですけど・・・」

「まあそれを渡して、それから羽衣を着て、月へと帰ってきたの。おしまい」

「・・・おしまいですね・・・」

六

「ところで」

「ん？何？」

「羽衣を着たら、地球の記憶は忘れるんですよね？」

「そうよ」

「じゃあなんで、インタビューに応じてくれたんですか？覚えてなかったらそう言うでしょうに・・・」

「・・・それはね。地球から送られてきたある文献を読んだからよ」
「ある文献って・・・まさか・・・」

「そう、『竹取物語』よ。どこかの誰かさんが書いたSFね。やけに聞いたことあるなあ・・・と考えて読んでいたら、ハッって思い出したのよ。あのころ、地球にいた頃の記憶を」

「・・・なるほど」

「羽衣も、完全ではなかったの・・・」

.....

そうして、インタビューは終わった。

ワタナベは感じた。

月の民は、なんと羨ましい生活をしているのかということ。

そして、魂に刻んだ記憶は、何処の民でも忘れようがないという
ことを。

.....
.....
.....

(後書き)

・・・ふいー。書き終わった(約二日間)。半分思いつきで書いた
ものですので、あまり内容を本気にしないでください。それでもま
あ、原文は参照しましたし、ちつとはまともかな。お読みくださり
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7791g/>

ちょっと不良なかぐや姫

2010年10月10日03時02分発行